

オマーン再訪

マングローブ・プロジェクト以来 AAIN でオマーン国を扱うのは久しぶりとなるが、今回短期間ではあるが訪問する機会を得たので、再びオマーンを取り上げたい。1989 年の初回訪問時は隣国のアラブ首長国連邦から陸路オマーン入りして車で自由に移動できたので、海岸線から内陸部まで様々なオアシス地帯を見学することができた。特に山間の小さなオアシスでは、ナツメヤシ 1 本 1 本に対してきめ細かな手入れが行き届いている様子に感動したことを覚えている。木の根元には家畜糞が丁寧に施され、灌漑のために作られた水盤や水路の維持管理も行き届いているように観察された。そのため、ナツメヤシ園そのものがひとつの美しい景観として目に焼き付いている。また、オマーン人農家が自ら木に登って枝打ちをしており、外国人労働者にはほとんど頼っていないことにも驚かされた。2 回目の訪問は 1997 年で、この時は我が社の社員が全員マスカットに集合するという極めて珍しい状況でのオマーン訪問であった。その際の議論を通して出来上がったマスカット基金は、今でも我が社の NGO 的な活動の実施に活用されている。3 回目は 2003 年にマングローブ植林の開発調査に GIS の専門家として参加し、当時の地方自治環境水資源省 GIS 部門のスタッフと一緒に充実した日々を送ったことを思い出す。GIS 部門にはパロチスタン出身者やザンジバル出身者が混在しており、部屋の中ではアラビア語に加えてウルドゥー語やスワヒリ語が飛び交っていた。ドバイやケニア・タンザニアでの滞在経験が長い私にとって、なんだかとても居心地の良い部屋だった。マトゥラの港でダウ船を眺め、スークの中を歩きまわれば、インドからザンジバルに至る交易の歴史を五感で感じることができるのも、オマーンの良さのひとつになっている。

今回は 2 月から 3 月にかけての 1 ヶ月程の滞在であったが、年間で最も良い季節を楽しむことが出来た。過去 3 回の訪問では行く機会に恵まれなかったジャバルアクダルにも行くことが出来た。ジャバルアクダルを翻訳すると「緑の山」という意味で、乾燥した山岳地帯に忽然と現れる緑の段々畑を目の当たりにしてその名前の持つ意味を実感することができた。今回の滞在中に JICA の研修員 OB で組織する同窓会が催された。研修員 OB、大使館関係者、JICA 関係者あわせて 20~30 人程度の参加者であったが、魅力的なプログラムが準備されていた。小さなマリナに集合すると、まずは日本紹介ビデオとオマーン紹介ビデオが上映された。オマーン紹介ビデオは観光省が作成したものであり、沙漠の自然や海の自然といったオマーンが強調されていた。ビデオ鑑賞後 1 時間半程のクルージングに出るが、ビーチリゾートを海側から眺めたり、底がガラス張りになった特別船に乗り換えてサンゴ礁の生態を観察したり、最後は少し沖に出てドルフィン・ウォッチングを楽しむというものだった。まさに、ビデオで紹介された内容の一部を現実に体験することとなった。その後、マリナに戻ってみんなで昼食をとりながら情報交換をするという、コンパクトながら中身の濃い同窓会だった。

オマーンは私にとって大好きな国の一つであるが、今回の訪問で益々好きになったように感じる。それは、オマーン人が自らの力で国を発展させて行こうとする意気込みを、いたる所で実感することが出来るからだと思う。この国は ODA 卒業を間近に控え、その後はイコールパートナーとしての協力関係に移行していくことになる。国際耕種としては、これまでに培ってきた協力関係や人脈も生かしつつ、ポスト ODA 時代にふさわしい協力活動の実施に少しでも貢献したいと考えている。

(大沼洋康)



観光客で賑わうマトゥラの港とスーク



内陸部ニズワのオアシス



ジャバルアクダルの段々畑